

古代エジプト人と動物たち

内 田 杉 彦

明倫短期大学 歯科技工士学科

Ancient Egyptians and Animals

Sugihiko Uchida

Department of Dental Technology, Meirin College

キーワード：古代エジプト，動物，ペット，家畜

Keywords: Ancient Egypt, Animals, Pets, Domestic Animals

1. はじめに

不毛の砂漠の只中を，大河ナイルが地中海まで滔々と流れ，それに沿って緑の平野が伸びるエジプトの国土は，7千万をこす人々の生活の場であるだけでなく，多種多様な動物が生息し，多くの渡り鳥が翼を休める巨大なオアシスと言える。そこでは，動物は人間の生活と深く関わりあっている。たとえば，自動車が普及した現在もなお，輸送手段としての家畜は健在であり，カイロのような都会でさえ，荷車を引くウシやロバ，ラクダを見かける。農村では，作物をうずたかく積み，あるいは農夫をのせてとぼと歩むロバは，追い立てられていく家畜の群れや，畑で虫をついばむ水鳥などとともに，日常の光景となっていると言えるだろう。

このエジプトに文明が成立した約5000年前には，北アフリカの気候は湿潤で，エジプトとその周辺には現在よりも多種多様な動物たちが生息していた。ナイルの東西の砂漠はキリンやゾウ，ライオンなどが生息する草原であり，ナイル流域にはワニやカバがみられたのである。その後，気候の乾燥化がすすみ，早くから姿を消した動物も少なくなかったが，古代のエジプトにおける人間と動物の関わりが現在

表1 古代エジプト年表（内田杉彦『古代エジプト入門』岩波書店，2007年 の年表より）

先王朝時代（紀元前5500～3000年）
王朝時代（紀元前3000～332年）
初期王朝時代（第1～2王朝：前3000～2682年）
古王国時代（第3～6王朝：前2682～2191年）
第一中間期（第7～11王朝：前2191～2025年）
中王国時代（第11～12王朝：前2025～1794年）
第二中間期（第13～17王朝：前1794～1550年）
新王国時代（第18～20王朝：前1550～1069年）
第三中間期（第21～25王朝：前1069～712年）
末期王朝時代（第25～31王朝：前712～332年）
ギリシア系王朝時代（前332～30年）
プトレマイオス朝時代（前304～30年）
ローマ支配時代（前30年～後395年）

よりも密接なものであり，動物が人々の生活や文化のなかで大きな位置を占めていたことは疑いない。

このことは先王朝時代の土器や化粧板（パレット）の装飾，王朝時代の墓や神殿の壁画と浮彫などに，家畜や野生動物の姿が数多く表現されていることにより示される。とりわけ王朝時代の美術作品においては，それぞれの動物の特徴がよくとらえられており，当時の人々が，自分たちの周囲で生きる動物たちに対して，強い関心を持っていたことがうかがえよう。また古代エジプトのヒエログリフ（聖刻文字）

は、標準的なもので約760字を数えるが、そのうち人間以外の動物やその身体の一部などをかたどった文字はあわせて180以上にのぼる¹⁾。これも動物が、当時の人々の生活や思考様式のなかで大きな位置を占めていたことのあらわれと言えるだろう。

古代エジプト人は、動物とどのような関わりを持ち、動物をどのような存在と捉えていたのだろうか？動物のなかでもとくに人間とのつながりが深く、そのため比較的多くの資料が残されている「ペット」と「家畜」を中心に、当時の人間と動物の関係、古代エジプト人の「動物観念」の一端について紹介したい。

2. イヌ^{2) 3) 4)}

イヌは人間によって家畜化された最初の動物とされ、旧石器時代にはすでに、猟犬として人間とともに暮らしていたとみられる。エジプトでも先王朝時代のいくつかの遺跡からこうした猟犬の遺骸が発見されているほか、砂漠に残された当時の岩絵には獲物を追いつめる狩人と猟犬の群れが描かれ、イヌが早くから狩猟に利用されていたことがうかがえる⁴⁾。農耕と牧畜が盛んになるにつれ、生活手段としての狩猟は重要性を失っていくが、砂漠の野獣を対象とした狩猟は王や貴族のような上流階級のスポーツとして行われていた。

第1王朝時代の貴族の墓から発見された石製遊戯盤⁵⁾の表面には、ガゼルを追う猟犬と、ガゼルの首筋に噛み付く猟犬の姿が浮彫りされており、猟犬を用いた狩猟が上流階級の娯楽のひとつだったことがわかる。ここに描かれた猟犬はいずれも尖った耳と鼻面、丸まった尻尾という特徴を示している。古王国時代の貴族の墓浮彫には、墓主の貴族が生前に楽しんだ狩猟の場面を表したものがあがるが、そこに登場する猟犬もこのタイプであり、添えられた銘文によればこのような猟犬は古代エジプト語でチェセムと呼ばれていた^{3) 4)}。

しかし、古代エジプト人は、異なるタイプの猟犬として、垂れた耳、短い鼻面、長い尾という、現在のサルーキ猟犬の特徴を持つイヌも早くから利用していた。先王朝時代の「2頭のイヌの化粧板」の浮彫にも、ガゼルやハーテビーストのような野生動物に襲いかかるサルーキの姿が示されている⁶⁾。このサルーキは、古王国時代の狩猟場面にはほとんど見られず、当時はあまり利用されなかった可能性があるが、中王国時代の墓の壁画や浮彫には、チェセム

猟犬とともに主人の伴をし、狩猟に活躍するサルーキの姿がみられるようになる⁴⁾。

新王国時代になると、壁画や浮彫などに姿を見せる猟犬の多くはこのサルーキとなった^{3) 4) 7)}。第18王朝のトゥタンクアムン王墓から発見された副葬品の装飾にも、戦車にのって狩猟をする王に従うサルーキ猟犬の姿が数多く表されている^{4) 8)}。

しかし、古代エジプト人が知っていたイヌは、これら猟犬だけではなく、たとえば中部エジプトのベニ・ハサンに造営された中王国時代の豪族の墓壁画には、猟犬とならんで、脚が短く胴体が長いイヌや、おそらく雑種とみられるずんぐりしたイヌが描かれている^{3) 4)}。交配や品種改良がなされた結果、さまざまな特徴をもつイヌが生まれた可能性があるが、野犬も早くから数多く生息していたとみられる^{2) 4) 7)}。新王国時代の文学作品「二人兄弟の物語」⁹⁾には、夫が不実な妻を殺害したあと、その死体をイヌたちに投げ与えるというエピソードが含まれている。この「イヌ」は、原文では猟犬を意味するチェセムではなく、擬声語の名称であるアウで表記されており、人に飼われていない野犬を指すとみることができる⁷⁾。エピソードそれ自体は誇張であろうが、現在のエジプトの農村でもそうであるように古代においても、人里近くに野犬が群れをなしており、人々に恐れられていたのであろう^{2) 7)}。このような野犬から人や家畜を守る番犬としても、イヌは早くから飼われていたに違いない。

イヌはまた、戦争にも用いられたとみられる。王が異民族と戦い勝利を納める場面は神殿の浮彫などにしばしば表されるが、そこには王とともに戦う猟犬の姿も描かれる場合がある。トゥタンクアムン王墓出土の「彩色箱」には、サルーキ猟犬が、狩猟の獲物ばかりでなく敗走する敵兵にも襲いかかる場面が描かれている^{4) 8) 10)}。また、第19王朝のラメセス2世が造営したベイト・エル・ワリ神殿の浮彫には、王が引き据えた捕虜にかみつく王の愛犬の姿がみられるのである¹¹⁾。

地方豪族が相争う内戦が起きた第一中間期には、その世相を反映して、弓矢で武装した兵士の姿を表す墓碑が作られたが、これらの石碑には、彼らの愛犬の姿がしばしば刻まれている^{2) 4) 12)}。このイヌたちもまた、主人に従って戦場に出たのかもしれない。中王国初期の官吏で、砂漠にのがれた逃亡者の探索にあたったカァイという人物の墓碑には5頭の猟犬の姿が表されているが、これらはおそらく「警察犬」

として、主人の仕事を助けたのであろう^{2) 13)}。

イヌはまた、現在もそうであるように、ペットとしての役割も果たしていた。中王国時代の墓壁画に描かれた短い脚のイヌについてはすでに触れたが、これは獵犬というよりはむしろ、愛玩用のペットとみることができる。貴族の墓壁画や墓浮彫には、墓主の貴族やその妻が椅子に腰掛ける姿が表されているが、その椅子の下（おそらく実際には横）には、おとなしくすわる獵犬の姿が描かれる場合があり、獵犬もまた、飼い主にとって身近な愛玩の対象だったことがうかがえる^{2) 3) 4)}。

イヌが古代エジプト人にとって極めてなじみ深い動物だったことは、彼らがイヌに名前を付ける習慣を持っていたという事実^{2) 3) 7)}からも察せられる。イヌは獵犬としての名称（「チェセム」）、擬声語の呼び名（「アウ」あるいは「アウアウ」）のほか、しばしば個別の名前を持っていたのである。壁画や浮彫にみられるイヌの図像にはそうした名前を記す銘文がしばしば添えられており、「黒檀」や「良きもの」、「北風」などイヌの体色や性質、走る速さを示すもの、生まれた順番を示す「五郎」や「六郎」にあたるものなど、古代エジプト史を通じて約80の名前が資料に残されている。

イヌの名前には外国語のものも含まれており、たとえば第11王朝初期の王アンテフ2世の石碑に刻まれた数頭のイヌの像には、外国語の名とそのエジプト語訳を示す銘文が添えられている^{2) 14)}。これはとくに上流階級の愛犬のなかに、外国産のイヌが含まれ珍重されていたことを示しており、それは墓や神殿の貢納場面に、異国からもたらされたイヌの姿がみられることから裏付けられる¹⁵⁾。

しかしイヌは上流階級の独占物だったわけではなく、庶民と苦楽をともにする伴侶でもあった。第19王朝時代の王墓造営職人イプウイの墓壁画には、働く庭師や牧人とともに過ごすイヌたちの姿が描かれている^{3) 16)}。

主人に可愛がられていたイヌは、少なくとも上流家庭の愛犬の場合、死後に主人の墓か自分用の墓に丁重に埋葬されることがあった^{2) 3)}。たとえば王墓地のギザで発見された古王国時代の石碑には、王の愛犬の埋葬と墓の造営を命じ、石棺と上質の布、香料、香油を下賜することを定めた銘文が刻まれている²⁾。早くから人間の伴侶となっていたイヌは、死後も亡き主人とともに過ごすことを望まれていたのである。

3. ネコ^{2) 3) 4) 17)}

現代人にとってはイヌとならんで身近な動物と言えるネコの飼育が最初に行われたのはオリエント地域とされており、エジプトでも前4000年頃の工人の墓からペットとみられるネコの骨が発見されている¹⁷⁾。

しかし、それから古王国時代まで、エジプトのネコに関する資料はわずかである。古王国時代後期の浮彫断片にネコを表すヒエログリフが地名として刻まれ、女性の人名のなかにミウト（「雌ネコ」）と読めるものが古王国時代からみられるにすぎない¹⁷⁾。これらは、ネコが当時の人々にとって多少とも身近な動物だったことを示すとはいえ、ネコと人間の具体的な関係については何も伝えてくれない。人々の生活のなかでネコはまだイヌほど大きな位置を占めておらず、ネコの飼育も広く行われてはいなかったのだろう。

中王国時代になると、人間に飼われるネコの姿が資料に現れるようになる。上エジプトのコプトスから出土した第12王朝時代の浮彫断片には、貴族の椅子の下にすわるイヌが片面に刻まれているが、その裏面には、貴族の妻の椅子の下に太ったネコが表されている^{3) 4) 17)}。おそらく墓浮彫の一部とみられるこの断片からは、ネコが上流階級のペットとしてすでに受け入れられていたことがうかがえる。



図1. ネズミの貴婦人とネコの召使（新王国時代の戯画より）

ネコはなぜ飼われるようになったのだろうか？この動物がネズミを捕ることは古代エジプト人にもよく知られていたであろう。新王国時代のオストラコンにはネズミをくわえたネコを描いたものがあるほか、同時期の戯画には、ネコの守る砦を攻略するネ

ズミの軍隊や、ネズミの貴婦人に奉仕するネコが描かれており、両者の実際の関係が意識されていたことは明らかである^{2) 17)}。中王国時代の墓壁画にも、ネズミと向かい合うネコを描いたものがあり、ネコが人間と関わりを持った当初からネズミを捕る動物として意識されていた可能性はあると言える¹⁷⁾。

農耕民族だった古代エジプト人にとって、倉庫に蓄えた穀物をネズミから守ることは大切だったはずで、ネズミを巧みに捕食する野生ネコを、ネズミ除けのため飼いならしたことはあったかもしれない。また、新王国の宗教文書「死者の書」には、太陽神の敵である大蛇アペピを倒すネコが登場するが¹⁷⁾、これは蛇をネコが実際に捕ることから生じたイメージかもしれず、ネコが飼われるようになった理由のひとつに毒蛇除けがあった可能性もあると言える。

しかしたとえそのような事情があったとしても、ネコの役割は、イヌの場合ほど実用的なものでなかったことは確かである。新王国時代の墓壁画や墓浮彫には、人間とともに暮らすネコがしばしば描かれるようになるが、その多くは飼い主の椅子の下でくつろぎ、ときには魚や肉にかぶりつく姿で表されているのである。前述のイプウイの墓壁画には、墓主夫妻の椅子の下にイヤリングと首輪をはめたネコがおり、主人の膝にのってじゃれつく子猫も描かれているが^{16) 17)}、これは同じ墓壁画にみられるイヌの姿とは好対照をなすと言える。人間の仕事を屋外で手伝うことを期待されていたイヌとは異なり、ネコは飼い主を楽しませるためむしろ屋内で飼われるペットとして、当時の人々、とりわけ上流階級に受け入れられていたのであろう。

ネコの上の椅子に腰掛けるのはもっぱら女性であり、そのことから、ネコが女性に関わる象徴的な意義を帯びていたのではないかとみる研究者もいるが²⁾、女性の椅子の下にイヌが描かれた例¹⁸⁾もあり、そのような解釈にはやや無理があるように思われる¹⁷⁾。男女がならんで腰掛ける姿を描く場合、男性が女性の前方に位置するように表されたため¹⁹⁾、ペットを描くスペースはどうしても女性の椅子の下に生じる点にも注意すべきであろう。ただし、家を守る主婦の役割を負った当時の上流夫人²⁰⁾にとってネコが格好のペットとされていた可能性はあると言える。

とはいえ、ネコの活動の場は屋内に限られていたわけではない。貴族の墓壁画には、墓主が家族とともに湿地で魚をとり、水鳥を狩る場面がしばしば表されているが、新王国時代になると、そこに飼い主

のお供をするネコの姿もみられるようになるのである。第18王朝時代のネブアムンの墓壁画では、妻子とともに水鳥を狩る墓主ネブアムンのかたわらに、水鳥をくわえるネコが描かれ、やや後の（模写のみが現存する）スィムトの墓壁画では、同じく水鳥を狩るスィムトの足にじゃれつくネコの姿がみられる¹⁷⁾。この湿地での狩猟場面は、添えられた銘文によると来世の光景であり、復活を遂げた死者が永遠の恵みを楽しむ様子とされているが、このような狩猟が実際に娯楽として行われ、ネコがそこで水鳥を驚かす役割を果たしていたことは十分にあり得る¹⁷⁾。

少なくともこの狩猟場面に描かれたネコは、死者が来世で活力を得る大切な機会にも必要とされていたことは確かであろう。さまざまな名前が付けられたイヌと違って、ネコは普通、擬声語のミウ（あるいはその女性形のミイト）と呼ばれるだけだったが、上流階級の人々に可愛がられていたネコはやはり、丁重に葬られる場合があった。第18王朝のアクエンアテン王の兄にあたる王子トゥトモセは、亡き愛猫のため石棺を作らせたが、それには供物卓の前にすわるネコの姿とともに、人間の死者のものと大差ない供養文が刻まれており、死後の再生と復活への道がネコにも開かれていたことがうかがえるのである^{2) 17)}。

4. サルとヒヒ^{2) 3) 4)}

古代エジプト人がペットとしていた動物にはサル（サヴァンナモンキー、パタスモンキー）とヒヒ（マントヒヒ、アヌビスヒヒ）も含まれる。これらは北アフリカの気候乾燥化にともなってエジプトからは徐々に姿を消しており、そのためヌビアや内陸アフリカから輸入されていた。新王国時代の壁画や浮彫には、ヌビア人や、東アフリカにあったとされるブントの人々が象牙や黄金などの産物をたずさえ、内陸アフリカのさまざまな動物とともに、サルやヒヒを連れてくる場面が描かれている^{2) 4) 11) 15)}。サルとヒヒがエジプト美術に表現されるのは、最初の繁栄期である古王国時代の頃だが、その後はあまりみられず、エジプトが広大な領土を獲得する新王国時代になると、再び数多く表現されることが指摘されている³⁾。これはサルとヒヒの輸入がエジプトの国力の変遷に影響されていたためだろう。

サルとヒヒはなぜ輸入されたのだろうか？当時の人々の興味を引いたのはおそらく、これらの動物のユーモラスな特徴、高い知能を持ちいたずら好きで

人間の真似をする点などであろう。事実、新王国時代の書記学校の教本には、生徒に対して「サルにも踊りを教えられる」「サルでも言葉はわかる」などと発破をかけたくだりがみられる^{2) 21)}。またサルとヒヒは、イヌやネコと同じく浮彫や壁画では主人の椅子の下に表される場合があるが、品物を差し出す姿や道化師と思われる小人に連れられた姿が示されることもあり^{2) 3) 4) 22)}、見る人を楽しませる動物だったことがうかがえる。

ヒヒが飼われた背景には、とくに宗教上の理由があったのではないかとされている²⁾。ヒヒはおそらく夜明けと日没に群れをなして騒ぐことから、太陽神に挨拶する神聖な動物とみられ、神殿の浮彫やオベリスクの台座には、太陽神に向かって敬礼の仕草をするヒヒの姿が表された。ヒヒに付与されたこのような性格が、わざわざヒヒが輸入された理由のひとつだったのではないかというのである。

しかしヒヒを目にした当時の人々にとって、この動物はサルと同じくユーモラスな存在と感じられていたように思われる。第5王朝時代の貴族ネフェルとその父カァハイの共同墓に刻まれた浮彫には、進水しようとする舟の舳先に立って棒を振り回すヒヒと、ワイン作りのため果汁搾りをする男たちを手伝うヒヒが描かれている²³⁾。ここに表されているのが実際にあった出来事かどうかは不明だが、ヒヒは人間の動作をまねるほど賢く愛嬌のあるペットとみられていたと言える。

しかしヒヒは、もっと現実的な用途に使われることもあった。古王国時代のいくつかの墓浮彫には、市場の場面が表されているが、そこに警備員に連れられて見回りをし、万引き犯人を捕まえるヒヒの姿が描かれているのである^{2) 24)}。ヒヒは大人になると気が荒くなり、ヒョウやチーターのような猛獣でもときに撃退することが知られている。ヒヒが番犬代わりに使われたのは、この動物のそうした性質を利用したものであろう。

ペットとされたサルとヒヒも、イヌやネコと同じように、死後は丁重に埋葬される場合があった。新王国時代の王墓地「王家の谷」には第18王朝の王のペットとみられる動物たちの墓が作られており、そこからはイヌやアヒルなどのほか、数頭のヒヒのミイラが発見されている²⁵⁾。

5. 家畜^{2) 4)}

古代エジプト人が先王朝時代のはじめまでに主要



図2. 牛の放牧と乳搾り（古王国時代の墓浮彫より）

な家畜としたのはウシ、ヤギ、ヒツジ、ブタであり、その多くは王家や貴族などの上流階級、あるいは神殿の所有物であった。ウシは古くからいた長角牛にくわえ、古王国からは短角牛が飼育され普及したほか、新王国時代には西アジアからコブウシが導入された。ウシは用途によって、食肉用の去勢雄牛、耕作や脱穀に使われるウシ、乳牛に分けられたが、結局はすべて屠殺され、肉や皮、骨などが無駄なく利用された。また、牛糞は他の家畜の排泄物とともに貴重な燃料となっていた。

このように経済的な価値が高かったウシは最も高価な家畜であり富の指標でもあった。貴族の墓には、ウシを屠殺してその前脚を墓主への供物とする場面が描かれるが、これはウシをたやすく犠牲にできるだけの富をもつことを誇示したものと考えられる。

ウシには、去勢雄牛かどうか、若いかなどによってさまざまな呼び名があったが、ヒツジとヤギは一括して、ふつう「小さな家畜」と訳される名前（アウト、アंक）で呼ばれることがあり²⁾、家畜としての価値がウシほどではなかったことがうかがえる。事実、新王国時代の資料によれば、この「小さな家畜」の値段はウシの最も安い価格のせいぜい1/4にすぎない²⁶⁾。

ヒツジのうちはじめに利用されたのは螺旋状の角を持つ品種で、畑に蒔かれた種を踏ませるのに使われ、肉や皮などが利用されていたが、新王国時代には彎曲した角と豊かな羊毛をもつ新たな品種が導入され、毛織物の普及とともに従来の品種に取って代わった。ヤギは砂漠に生える灌木の芽や葉を食べるので環境に順応しやすく、比較的安上がりで飼いやすい家畜だったと言える。ヤギはミルクのほか、皮や肉が利用されたが、ヤギの肉は庶民がたまに楽しめる「ご馳走」であった。

ブタは餌を選ばずなんでも食べたので、ヤギより値段がやや高かったとはいえ²⁶⁾ やはり安上がりな家畜であり、食肉用に各地で広く飼育され、貴族や神殿の領地でも数多く飼われていた。豚肉は、おそらくブタの飼育環境が不潔だったことや、宗教上の理由があったために、下等な食物とされていた可能性があるが、庶民だけでなく上流の人々も食べており、神々への供物とされることもあった²⁷⁾。

壁画や浮彫には、これら食用の家畜が（ブタを例外として）しばしば描かれているが、そのなかには、当時の人々がそれらの家畜に感じていた親しみや愛情をうかがわせるものがわずかながらみられる。たとえば第11王朝の王女カウイトの石棺浮彫に刻まれた乳搾りの場面には、子牛が邪魔にならぬよう母牛の脚につながれ、母牛が涙を流している様子が描かれており、我が子に乳を与えられない母牛の哀しみを示すかのようである¹⁰⁾。高価な家畜だったウシはそれなりに大切にされたようで、雌牛には名前がつけられることがあったし、書記学校の教本には、従順で働き者のウシを怠慢な生徒と対比して讃えるくだりが記されている²⁾ ²¹⁾。

運搬用の家畜として現在に至るまで広く利用されてきたのはロバだった。ロバはわずかの水と砂漠に生える灌木があれば生きることができ、50kgまでの振り分け荷物なら運ぶことができた²⁾。墓壁画や墓浮彫には、大量のムギを脱穀場や穀倉に運び、脱穀をし、人を乗せるロバの姿が描かれている。西部砂漠を通過してヌビアに向かう隊商や、東部砂漠の採石場でも、数多くのロバが役畜として働いていた⁴⁾。第1王朝時代にはロバを埋葬した墓がいくつか作られており、人間のため数千年間も働き続けたこの動物が、それなりの敬意を払われる場合があったことがうかがえる⁴⁾。

第二中間期に異民族ヒクソスがエジプトに持ち込んだウマは、その後、エジプト国内で盛んに飼育され、新王国時代には西アジアから、かなりの数のウマが貢物や戦利品などとしてエジプトに運ばれた。

庶民の生活や仕事にも使われたロバとは違って、ウマはもっぱら上流階級の狩猟や外出、戦争のために用いられた家畜であり、二輪馬車（戦車）を二頭立てで引くのに使われた。馬具が未発達だった当時、ウマにじかにまたがるのは例外的で、軍隊の斥候や伝令などに限られていたとみられる。ウマの引く戦車に乗るのは上流階級の特権であり、軍人のなかでも戦車兵は、当時の戦場の花形であった。戦車を駆っ

て突撃し、群がる敵兵を弓で射る王の姿は、新王国時代の美術表現にしばしば見られる。これは当時の戦車とウマが権力と地位の象徴だったことを物語ると言えるだろう。第18王朝のアメンホテプ2世は、王子のころ軍馬の調教に熟達していたことを誇る銘文を残しているが²⁾ ⁹⁾、これは立派なウマを育てて所有することが当時の上流階級にとっていかに誇らしいことだったかをうかがわせる。この王の愛馬をはじめとして王家の所有する何頭かのウマには名前が付けられていたことが判明しているが²⁾ ²⁸⁾、これもウマが飼い主の貴重な伴侶として大切にされていたことのあらわれであろう。

6. その他の動物たち²⁾ ³⁾ ⁴⁾

エジプトは古くから数多くの野鳥が生息し、あるいは渡りの途中で翼を休めるところとなっている。古代エジプトの壁画や浮彫には、これら鳥たちの姿が70種類以上も表されており、鳥や鳥の身体の一部をかたどったヒエログリフは60以上にのぼるが¹⁾、これは当時の人々が数多くの鳥を目にして、その姿形や習性、鮮やかな色彩に強い関心を抱いていたことのあらわれと言えるだろう。



図3. ペットの小鳥を持つ少女（古王国時代の墓浮彫より）

食用となる野鳥が豊富で捕獲が容易だったため、家禽の飼育はあまり盛んではなかったとみられるが、水鳥のハイイロガン、マガン、エジプトガンが鳥小屋で飼育されていた。また鳴き声の美しいコウライウグイス、独特の冠毛をもつヤツガシラやタゲリのような野鳥にくわえ、家禽のなかでも気性が荒いエジプトガンもペットとされた¹⁷⁾。

王や貴族の狩猟の獲物となっていた野生動物にも、生け捕りにされ飼育されるものがあった。たとえばガゼルやアイベックスはいくつかの墓壁画や墓浮彫で飼い主の椅子の下に描かれており^{3) 4)}、ペットのガゼルが専用の棺に納められ埋葬された例も知られている²⁵⁾。異国からエジプトの宮廷に運ばれてきた動物も多く、そのなかには、すでに触れたサルやヒヒのほか、内陸アフリカのキリンやヒョウ、チーター、西アジアのクマやゾウなどの珍獣も含まれており^{11) 15)}、王宮に作られた檻や飼育場に集められ、飼われていたとみられる。

なかでもライオンは、王や貴族の狩猟の獲物だけでなく王のペットとされる場合があった。トウトアムン王墓出土の小厨子の装飾や、ラメセス2世が造営したベイト・エル・ワリ神殿の浮彫には玉座の傍らに横たわるライオンの姿がみられるが^{3) 4) 8) 11)}、それはちょうど、イヌやネコのような貴族のペットが墓壁画や墓浮彫で彼らの椅子の下に描かれるのに相当すると言える。ベイト・エル・ワリ神殿のライオンには、その名前「彼の(王の)敵を殺戮するもの」が銘文で添えられており、このライオンが実際にラメセス2世のペットだったことを示している。ラメセス2世のライオンは、アブシンベル神殿の浮彫にも、戦車に乗って進む王の傍らを駆ける姿で表されている^{2) 4)}。早くから強大な王権の象徴とされ、東西の地平線と太陽の運行に関連づけられていたライオンは、太陽神の子として絶大な権力を振るった王のペットとして理想的な動物だったのかもしれない²⁹⁾。

7. おわりに

古代エジプトの人々にとって、動物とはどのような存在だったのだろうか? 中王国時代に書かれた文学作品「メリカラー王のための教訓」によれば、神は人間を養うため「植物と家畜、家禽、魚を作られた」とされており、動物は人間の生活のために存在するという概念があったことがうかがえる^{2) 30)}。

しかしそれは必ずしも人間を他の動物の支配者として特別視する見方ではない。古王国時代の宗教文書ピラミッド・テキストの呪文には、王が死後に来世の法廷で、生者や死者ばかりでなく水鳥や雄牛からも告発されずにすむよう守るものが含まれる^{2) 31)}。これは動物も人間と同じく世界の一部であり、神々や王の保護下にある存在として尊重されるべきだという考え方のあらわれであろう。古代エジプト人は、

神々から与えられた生命力(カァ)が人間ばかりでなくあらゆる動物に宿ると信じ、いかなる生物も、世界を支配する神々の力の一端を示すものと考えていた。彼らの残した芸術作品に描かれた多種多様な動物の姿は、世界と生命、そしてそれらを創造した神々への讃歌と言えよう。

*本稿は、2009年度明倫短期大学公開講座(第3回、2009年10月31日)の講演内容に、加筆・修正を施したものである。

文 献

- 1) Gardiner, A.H. : Egyptian Grammar. 3rd ed. Oxford University Press, London, 458-478, 1957
- 2) Janssen, R. and J. Janssen, : Egyptian Household Animals. Shire Publications, Princes Risborough 1989
- 3) Spalinger, G.L. : Pets. Brovarski, E. et al. Egypt's Golden Age : The Art of Living in the New Kingdom 1558-1085 B.C. 272-275, Museum of Fine Arts, Boston, 1982
- 4) Osborn, D.J. and J. Osbornová : The Mammals of Ancient Egypt. Aris & Phillips, Warminster, 1998
- 5) Malek, J. : Egyptian Art. 81, fig.41, Phaidon Press, London, 1999
- 6) Whitehouse, H. : Ancient Egypt and Nubia in the Ashmolean Museum. 28-32, no.15, The Ashmolean Museum, Oxford, 2009
- 7) Fischer, H.G. : Hunde. Helck, W. und Otto, E. (ed.), Lexikon der Ägyptologie, III. 77-81, Otto Harrassowitz, Wiesbaden, 1980
- 8) James, T.G.H. : Tutankhamun : The Eternal Splendour of the Boy Pharaoh. 4-5, 36-37, 78-79, 186-187, 256-257, 278-281, 290-293, White Star Publishers, Vercelli, 2000
- 9) Lichtheim, M. : Ancient Egyptian Literature, Vol. II. 39-43, 203-211, University of California Press, Berkeley, Los Angeles and London, 1976
- 10) Saleh, M. and H. Sourouzian, : Official Catalogue : The Egyptian Museum, Cairo. nos.68, 186, Verlag Philipp von Zabern, Mainz

- am Rhein, 1987
- 11) Ricke, H. , Hughes, G. and E.F.Wente : The Beit el-Wali Temple of Ramesses II. pls.9,14, 15, The University of Chicago Press, Chicago, 1967
 - 12) Fischer, H.G. : The Nubian Mercenaries of Gebelein during the First Intermediate Period. *Kush*, 9 : 44-80, 1961
 - 13) Anthes, R. : Eine Polizeistreife des Mittleren Reiches in die westliche Oase. *Zeitschrift für Ägyptische Sprache und Altertumskunde*, 65 : 108-114, 1930
 - 14) Janssen, J.M.A. : Über Hundennamen im pharaonischen Ägypten. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo*, 16 : 176-182, 1958
 - 15) Davies, Norman de Garis : The Tomb of Rekh-mi-re at Thebes. pls.XVII, XIX, XX, The Metropolitan Museum of Art, New York, 1944
 - 16) Scott, N. : The Daily Life of the Ancient Egyptians. figs.7, 35, The Metropolitan Museum of Art, New York, n.d.
 - 17) Malek, J. : The Cat in Ancient Egypt. British Museum Press, London, 1993
 - 18) Davies, N.de Garis : Five Theban Tombs. pls. XXV,XXVI, The Egypt Exploration Society, London, 1913
 - 19) Schäfer, H. : Principles of Egyptian Art.173-177, Griffith Institute, Oxford, 1986
 - 20) 内田杉彦：古代エジプトの女たち。明倫歯誌, 10(1) : 48-55, 2007
 - 21) Caminos, R.A. : Late Egyptian Miscellanies. 83, 377, Oxford University Press, London,1954
 - 22) Schulz, R. and M. Seidel, : Egyptian Art, The Walters Art Museum. 58-59, no.20, The Walters Art Museum, Baltimore, 2009
 - 23) Moussa, A.M. and H. Altenmüller : The Tomb of Nefer and Ka-hay. pls.12, 19, Verlag Philipp von Zabern, Mainz am Rhein, 1971
 - 24) Moussa, A.M. and H. Altenmüller : Das Grab des Nianchchnum und Chnumhotep. Abb.10, Verlag Philipp von Zabern, Mainz am Rhein, 1977
 - 25) Ikram, S. (ed.) : Divine Creatures : Animal Mummies in Ancient Egypt. 209-214, The American University in Cairo Press, Cairo and New York, 2005
 - 26) Janssen, Jac. J. : Commodity Prices from the Ramessid Period. 165-179, E.J.Brill, Leiden, 1975
 - 27) 内田杉彦：古代エジプト「食」事情。明倫歯誌, 8 (1) : 52-57, 2005
 - 28) Spurr, S., Reeves, N. and S. Quirke : Egyptian Art at Eton College. 25, no.20, The Metropolitan Museum of Art and Eton College, New York and Windsor, 1999
 - 29) Houlihan, P.F. : Felines. Redford, D.B. (ed.) : The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt, Vol.1. 513-516, Oxford University Press, New York, 2001
 - 30) Lichtheim, M. : Ancient Egyptian Literature, Vol. I. 106, University of California Press, Berkeley, Los Angeles and London, 1973
 - 31) Allen, J.P. : The Ancient Egyptian Pyramid Texts. 50, Brill, Leiden and Boston, 2005